

コメンテーター職における 大学教員の果たす役割の一考察

金井啓子*

Analysis on Roles of University Professors Appearing as Commentators on TV Programs

Keiko KANAI

Abstract

I, as a university associate professor and an ex-journalist, have appeared on several TV news and information programs as a commentator. Why are commentators necessary for such programs? There are two different types of commentators: experts such as university professors and non-experts like TV celebrities. What different roles do they play? This article centers on my experience as a commentator and analyzes roles of university professors who act as commentators by interviewing TV producers and reporters who have been in charge of producing those programs. Separately, the article also tries to find out how university professors affect their universities when they appear on the programs.

Keywords ① commentator ② television ③ university ④ professor ⑤ news

1. はじめに

テレビの情報番組には、番組進行役とは別にコメンテーターという立場の出演者がいる。ニュースを中心とする番組の内容がまず伝えられ、それに対して言葉を添えることがコメンテーターによって主に行われている。

大辞泉には「①注釈者 ②ラジオ・テレビなどの、ニュース解説者」、明鏡国語辞典には「解説者。論説者。特に、ラジオ・テレビなどの、ニュース解説者」という定義が載っている。

では、そのコメンテーターはなぜ出演しているのだろうか。また、コメンテーターの中には、大学教員などの専門家と、格別に深い専門分野を持たない評論家や芸能人などの2種類に大きく分けることができるが、それぞれがどのような役割を果たすことを求められているのか。

筆者自身、コメンテーターとしてこれまでに複数の情報番組のスタジオで番組の最初から終わりまで通して生放送で出演したり、一部分だけビデオで出演するという経験を持っている。

本稿は、コメンテーターとしての筆者の出演経験に関する実践報告を中心としつつも、異なるいくつかのテレビ局で情報番組の制作に関わる経験を持つ記者やプロデューサーたちへの聞き取りを通じて、コメンテーターという立場における大学教員の果たす役割を中心に考察する。聞き取りを行ったのが、筆者が出演してきた番組に関わってきたテレビ局関係者が多いことを生かし、具体的な例を挙げながら検証していく。

最終的には、コメンテーターがいま果たしている役割を示すだけでなく、課題があるの

受付：平成28年5月9日 受理：平成28年7月31日

*近畿大学総合社会学部 社会・マスメディア系専攻（ジャーナリズム論）

か、これから起こりうる変化はどんなものなのか、といった点も含め、今後の展望も提示することを旨したい。

さらに、大学教員がコメンテーターを務めることによって、所属先である大学に対してどういった影響があるのかといった点についても、大学関係者に対する聞き取りを通じて、示していく。

2. コメンテーターが果たす役割

コメンテーターが情報番組において求められている役割はなんであるか、番組制作者たちは考えているのか。大きく分けると、1) 一般視聴者の代弁者として意見を発することで視聴者の共感や反感を呼んで視聴者に身近な問題としてとらえさせる、2) 番組制作者の意見を代弁する、3) 番組の流れにアクセントをつける、といった点が挙げられるようだ。

ケーブルテレビJ:COMの下田素司氏¹⁾はプロデューサーとして制作に携わっていた情報番組の『関西 TODAY』(2014年6月から2016年3月まで放映)におけるコメンテーターの役割を振り返り、「放送する情報に対し、一般視聴者の代弁者、住民の代表として意見を出すことだった。社会的問題などのニュースを伝える場合は、さまざまな見地からの考えを合わせて伝えてもらうことで、視聴者にとって情報をより

分かりやすく、身近な問題としてとらえてもらう役割を果たした。結果として視聴者のリテラシーを高め、番組として血の通った厚みのある情報を放送できていた」と語った。

また、関西テレビで2006年4月から2015年3月まで放送されていた『スーパーニュースアンカー』でプロデューサーを務めた経験を持つ川端充氏²⁾は、所属している組織の公式見解ではなく個人の見解だと前置きした上で、コメンテーターの発言によって視聴者から共感や反感を呼ぶことを期待し、「コメンテーター独自の視点で『そういう見方や考え方があるのか』と視聴者に思ってもらえればいいし、反対意見でもかまわない」と考えていると語っている。ただし、感情論に走って踏み込んだ発言をせず、一定の根拠をもって話すことが必要だと釘を刺すことも忘れなかった。(本記事における川端氏のその他の発言もすべて個人の見解である)

上記の2氏は視聴者を主眼においていたのに対し、テレビ大阪の報道部で記者を務めていた田淵菊子氏³⁾の視点はやや異なる。同氏によると、コメンテーターは「番組のメッセージ性、カラー、志向を表現」する存在だと定義。「ニュース・報道番組のなかで、唯一『好き嫌い・趣味嗜好』を大々的に言える立場なので…真のアンカーと言えるかもしれない」とも

- 1) 下田素司氏：テレビ番組制作会社・CATV局での勤務を経て、2006年にジュピターテレコム入社。記者・ディレクター・プロデューサーなどとして『東大阪市広報番組』『枚岡神社秋郷祭生中継』『統一地方選挙開票速報』『関西 TODAY』などの制作に関わった経験を持つ。現在は関西メディアセンターアシスタントプロデューサーで『デイリーニュース大阪』『デイリーニュース北河内』など地域情報番組を担当。金井による下田氏への聞き取りは2016年4月にメールによるやりとりを通じて行われた。
- 2) 川端充氏：1990年に関西テレビ放送入社。臓器移植など医療分野の取材を担当したのち、大阪府庁や大阪府警の記者クラブでキャップを務め、行政や事件など多くの取材に携わる。「2001年参議院選挙特番」のプログラム・ディレクターを経て、2006年より「スーパーニュースアンカー1部」の編集長を2年、2008年よりプロデューサーを4年務める。現在は報道センター報道部長。金井による川端氏への聞き取りは2016年4月にメールによるやりとりを通じて行われた。
- 3) 田淵菊子氏：2004年にテレビ大阪に入社し、制作部に配属されバラエティ番組のアシスタントディレクターとなる。2006年に報道部でディレクター・記者となり『なるほどラボ』『ニュース BIZ』などの番組の制作に携わる。2011年から2013年まで系列キー局のテレビ東京で『ワールドビジネスサテライト』をディレクター・記者として担当。2013年から2016年3月末までテレビ大阪・報道部記者として主に行政を担当し、『夕刊7チャンネル』『ニュースリアル』の制作に携わる。現在は営業推進部のタイムデスクを務める。金井による田淵氏への聞き取りは2016年4月にメールによるやりとりを通じて行われた。

述べた。「テレビは他メディアに比べ公平中立に報道しなければならず、両論併記になることから、制作者のメッセージが薄れがち。そこで、番組中のビデオでは両論併記とし、ビデオが終わった後のスタジオではコメンテーターが番組としての意見を代弁という構図にすることで、メッセージ性を打ち出している」のだという。そのため、基本的に番組制作者は自分の意見と近いコメンテーターを出演させようとする傾向があるとの見解も示した。

一方、毎日放送報道局勤務を経てJ:COMの番組アドバイザーとなった小林章良氏⁴⁾は、週5日放映されていた『関西 TODAY』ではコメンテーターが日替わりだったことに触れ、そのコメンテーターたちの役割は、個人個人によって異なっていたとの見方を示した。大きく分けると、出来事の背景や周辺の情報を提供する人がいる一方で、自分が感じた感想を語る人もいたのだという。また、同氏は、コメンテーター出演には演出上の意味合いもあるとした。アナウンサーがコメントを読んで映像が流れるだけの繰り返しでは単調で視聴者が飽きてしまう。そのため、コメンテーターの発言によって「流れにアクセントをつける」という演出上の効果が見込まれるのだという。

3. 専門性と幅広さの対比

コメンテーターには、大きく分けて、大学教員などの専門家と、格別に深い専門分野を持たない評論家や芸能人などがいることは、冒頭で述べた。朝日放送の記者の木戸崇之氏は、2種類のコメンテーターの違いについて「どちらかというとなんか自分フィールドを使って疑問を提示する役割、どちらかというとなんか識者は疑問を解決する役割を担っていると思われる。

視聴者の疑問をかき立てる役割と、視聴者の気づきを促す役割と言った方がいいかもしれない」と定義する。また、J:COMの下田氏は、「大学教員は教員としての責任感・信頼感・大学の看板を背負うがゆえ、自身の発言に制約がある人もいるのかもしれない一方で、それ以外の人達は制約なく自身の考えを軸にタレントとしてのパーソナリティを確立できるのではないかと比較してみせた。

さて、それぞれがどのような価値を出演番組にもたらしているのか。

制作担当者たちの目から見ると、大学教員などの専門家は、1) 専門的で深い知識を豊富に持っていること、2) 情報を収集し整理する能力を持っていること、3) 幅広い知識と多角的な視点を持っていること、4) 大学教員という肩書がもたらす信頼感があること、といった特徴がある存在なのだという。一方で、専門家ではない評論家や芸能人に関しては、1) 話術によって番組を盛り上げられること、2) 幅広いテーマへの対応が可能であること、3) 視聴者への効果的な働きかけができること、といった価値をもたらしているとの見方が示された。

まず、大学教員などの専門家である。J:COMの小林氏は、特定の事故・事件に対するコメントが必要な場合と、レギュラーで出演する時とでは、専門家のコメンテーターであっても求める役割がやや異なってくると前置きした上で、たとえば飛行機事故で気象学者にコメントを求めるとすれば、気象と事故との因果関係を専門的に語ってもらうことになり、かなり深い専門的な知識が求められるとした。一方、レギュラーコメンテーターである大学教員がこういった事態で出演している際には、自身の専門分野ではなくてもその件について抱いた疑問を語っ

4) 小林章良氏

1974年から2014年まで毎日放送に勤務し、20年余りの報道局勤務では記者・ニュースデスク・プロデューサーなどとして、ニュース取材やドキュメンタリー制作に関わった。ニュースではグリコ森永事件や山口組などの暴力団抗争、阪神淡路大震災など関西の事件事故取材のほか、湾岸戦争などでは海外でも取材。また十数本のドキュメンタリーを制作し数多くの受賞歴を持つ。現在もジュピターテレコム(J:COM)で情報番組のアドバイザーとして現場に立っているほか、大学で学生の指導にもあたっている。金井による小林氏への聞き取りは2016年4月にメールによるやりとりを通じて行われた。

たり、専門家に質問するといった形での番組への貢献が望まれるのだという。

また、テレビ大阪の田淵氏は、大学教員を「情報整理能力・発信力のある専門家」であり、「同僚の専門家にも意見を仰げるような立場で、専門外のデータも入手しやすい」ととらえている。つまり、出演者という立場だけではなく、一緒にデータを探ることができるスタッフやリサーチャーのような役割も期待しているのだという。さらに、難しい話題を扱う際にも、ある程度わかりやすくかみ砕いて説明できる能力にも期待を寄せていることを明らかにした。ただし、この点について、J:COMの下田氏は、人によっては一般視聴者が簡単に理解できない専門用語を多く使う場合もあるため、できるだけかみ砕いて話すよう事前に依頼するといった心配りが必要な場面もあることを明らかにした。

また、関西テレビの川端氏は、専門外のことを聞かれるケースを想定して出演を躊躇したり断る大学教員もいるとした上で、「わからないなら、わからないと言ってもらってよいと思う。ただし、豊富な経験を持っていると思うので、言える範囲をしっかりと持っておいてほしい」と述べた。大学教員に期待されているのは、幅広い知識を土台としてニュースからわかる世相の現状や将来などを読み解き、多角的な視点を提示できるといった点なのだ指摘した。

「情報の信ぴょう性、社内外への発信力や番組宣伝などにおいて、やはり大学教員という肩書きや前歴は番組にとって重要」と述べたのは、J:COMの下田氏である。同氏が携わった『関西 TODAY』にはマスメディア出身の大学教員であるコメンテーターが筆者を含めて複数いたことに触れ、「肩書きとして完璧、コメントも完璧だった」と振り返った。同じ番組に関わった小林氏も、「視聴者は『大学の先生』や『知識人』と言う肩書きから『やっぱり頭が良いなあ』と思えるコメントを期待していると思う」と付け加えた。

また、全国ネットではない地方のテレビ局ならではの視点を示したのは関西テレビの川端

氏。地元にある大学の教員が番組に出演すると、テレビ局として地元を大事にする姿勢を示すことができるので歓迎すべきことなのだという。

一方で、専門家以外のコメンテーターに関して、川端氏は「トークのプロであれば、スタジオトークの盛り上がりを期待する」と発言。J:COMの『関西 TODAY』でコメンテーターを務めた7人のうち唯一『文化人』という立ち位置でコメンテーターを務めていただいたと下田氏が指摘した落語家の桂小春団治氏について、小林氏も「やはり卓越した話術で番組を盛り上げていただける」と認めた。同氏はさらに、「評論家も講演などが本職の方が多く、芸能人とは違う味付けで場を盛り上げていただけることが多い」と語った。

また、テレビ大阪の田淵氏は、専門分野を特に持たないコメンテーターについて、「どんなテーマであっても、無難にコメントしてくれる人」であり「視聴者に感情移入させたいうえで、制作者の意図を理解するよう助けてくれる人」という期待を持っていることを明らかにした。だから、田淵氏自身はコメンテーターのことを「自分の言いたいことを言ってくれる分身」のようにすら思っているのだという。しかし、コメンテーターの中には、打ち合わせ段階で番組制作者の意図を汲んだコメントをするように見せかけながら、実際の放送では全く違うようなコメントをすることもあったとし、「そんなことをされた場合は、もう腸が煮えくりかえってモニターに向かって絶叫して」いたのだと認めた。また、他局の番組ではあるが、元経済産業省官僚の古賀茂明氏がテレビ朝日の『報道ステーション』降板の経緯をめぐって、番組中で古舘伊知郎キャスターと口論になった件を例に挙げ、「古賀茂明さんの表現しなかった内容には共感する部分もあるが、番組制作者側としては、許せない手法だ」とした。

4. コメンテーター出演の一例を取り上げて

前述のように、筆者はこれまでに複数のテレビ番組に出演してきた。具体的には、日本テレ

ビ『世界一受けたい授業』に講師として出演したのが7回（うち1回はビデオにて番組の一部に出演）、関西テレビの『スーパーニュースアンカー』にコメンテーターとして出演したのが6回、J:COMの『関西 TODAY』ではレギュラーコメンテーターとして2014年6月から2016年3月にかけて隔週水曜日に出演。さらに、テレビ大阪の『夕刊7チャンネル』（2013年4月から2015年3月まで放映）は、番組全体への出演ではないが、大阪市長選挙や地方議員の政務活動費問題等について数回にわたってビデオで出演した経験も持つ。

『世界一受けたい授業』は情報番組というよりはバラエティ番組としての色彩が強いため除き、ここではその他の3番組への出演経験を題材として、制作者として番組に関わっていた人たちへの聞き取り内容から、筆者自身に求められていた役割や、実際にもたすことができた貢献、そして残された課題について探っていく。

まずはコメンテーターとしての筆者に期待されていた役割について聞いた。筆者は大学教員の職に就く前に外資系通信社の記者として長年勤務していたこともあり、番組制作者側としては、元記者であり、そして大学教員および研究者である筆者、という複数の面で求める部分があったことが明らかになった。

たとえば、テレビ大阪の田淵氏が筆者に求めていたのは、説得力のあるコメントだったのだという。大学教員として「まず、大学に所属しているので、フリーコメンテーターより便宜供与を受けていないイメージがある。また、アカデミックな立場から、より専門的・客観的な分析コメントを言ってもらえるという期待がある」と話した。そして、元記者としては、ジャーナリズムの求めるコメントをわかってくれるだろうという「身内意識」があるのだという。一般の人々だけでなく大学教員の中にも「テレビ、イコール偏向報道をする悪の組織である『マスゴミ』（田淵氏）」と思い込んでいる人がいるが、筆者に対しては余分な事前説明をせず、「より取材にダイレクトに飛び込んでい

ける気安さ」があるのだとも語った。

また、関西テレビの川端充氏は、大学教員であることは知識が豊富であることを視聴者に想起させるため、発言に重みが出ることを期待する一方で、外資系通信社の元記者としては、外国の事情にも詳しく幅広い見地からの発言が期待できる、との見解を示した。こういったことから、「視聴者は多角的な視点でニュースを読み解くことができるのではと期待した」のだという。さらに、筆者が女性であるという点から、女性の視点を番組にもたらせるのではないかという期待も持っていたことを示した。

次に、実際にそれぞれの番組への出演を終えた今、それを振り返って反省点や課題を挙げてもらった。

すると、関西テレビの川端氏からは、前述のように外資系通信社の元記者という視点からの発言が多かったとしたうえで、「『今の若者事情』という視点がもっとあってもよかったのでは」という意見が出された。

次に、J:COMの小林氏は、筆者のコメントに「なるほど、そう言う見方もできるのか」と納得できる内容が多く、ニュースの解釈の幅が広がったと評価した。ただし、「もっと遠慮せずにハッキリとしゃべっていただける環境を作りたかった」とも語った。この点については筆者からも付記しておくが、番組スタッフから出演者に対して発言を差し控えるような助言や圧力があつたわけではない。むしろ筆者自身の心の中で「ここまで話しても大丈夫なのだろうか」と自問自答した結果、抑制を効かせてしまった自覚はある。それが影響して、やや鋭さや面白みに欠けるコメントとなってしまった部分があつたのかもしれない。後述するが、川端氏からもコメンテーター全体に対して、「無難なコメントはあまり視聴者の感情を動かさない」という警告が出された。

また、J:COMの下田氏からは、各コメンテーターの専門分野を生かした企画をしたかったとの声が出た。例えば、元記者である筆者には、政治家に対するインタビュー取材企画などができればなどと考えていたのだという。ただ、「弊

社はメディアとしてはまだまだ成長過程であるため、力不足で実現できずとなってしまった」と残念がった。これに関しては、筆者が受け身の姿勢であったことも原因だったかもしれないと筆者自身が反省材料として受け止めている。つまり、元記者である前歴を生かして企画を立てて番組スタッフに提示するといった姿勢を示せば、さらなる展開が見込めたのかもしれない、惜しまれる。

一方、テレビ大阪の田淵氏は、筆者に当てはまる問題というよりはむしろ一般論であると前置きしたうえで、テレビ局の記者がすべてのインタビュー相手に対して望むのは「コメントを言い切って欲しい」ということなのだと語った。「1秒でも惜しいメディアとしては、『〇〇は××です!』とキャッチフレーズ・紋切型で言い切ってほしい。『この場合は、あくまで私の考えですが、〇〇は××だと推測されるケースが多いといえるかもしれません』などと言われると、『この場合～ですが』『だと～かもしれません』の尺が勿体ないと感じてしまう」のだという率直な思いを吐露してくれた。

筆者自身も、テレビ番組に出演し始めた当初は「言い切る」ことがなかなかできず、他の情報番組に出演した経験を持つ知人から「話が長い。それでは視聴者の関心は続かないから聞いてもらえない」と何度も注意を受けた。その結果、できるだけ短く、なおかつ結論を最初に持っていくことを心がけるようになった。テレビというメディアの特性上これはやむを得ないことなのだろう。

なお、テレビメディアの特性については本稿の主旨ではないが、ここで簡単に説明しておきたい。端的に言えばテレビとは「印象のメディア」である。印象のメディアとは、そこで誰が何をどのように語ったのかといった論理性よりも、どのような話し方であったか、コメンテーターは怒っていたか冷静だったのか、あるいはどのような色の服装だったか、センスが良くて似合っていたのか不釣り合いだったのかといった見た目の印象が視聴者に大きなインパクトを与えるものである。それはコメンテーターなど

が語る内容以外にも映像や音声という膨大な情報が同時に流れるからであり、情報量で比較した場合、語られる内容より映像等の方がはるかに巨大だからである。テレビというメディアを目の前にした視聴者が、より大きな情報へと目を向けるのはやむを得ない。

この点、新聞や雑誌などのメディアは情報が活字だけであることから、テレビのような見た目の印象は削ぎ落とされており、話の内容や論理が読者の心に大きく影響する。テレビが「印象のメディア」なら、新聞や雑誌は「論理のメディア」といえる。

コメンテーターが印象のメディアを相手にする場合、活字媒体のような論理性よりも、結論は完結に、かつ端的にといった情緒性に重きを置くことが訴求力という点からも大切な問題となってくる。

テレビというメディアにおけるこうしたやり方に筆者が当初慣れることができなかったのは、おそらく筆者が映像や音声のジャーナリズムではなく、活字のジャーナリズムの出身であることと深く関わっているものと考えられる。つまり、文字を通じて情報を伝える際には、結論を中心に短く言い切ることはあまりせず、むしろテーマを取り巻く状況や背景、前提条件などを説明した上で、導き出される結論を提示するという形を取る。手間をかけたほうが、読者は理解しやすくなるという考え方に基づく。もっとも、メディアは活字だけではない。テレビのような映像メディアが大きな影響力を持つことから、これらの特性を知ることによって発信者の訴求力を持たせることができる。

ただし、テレビで情報を伝えるためには「言い切る」ことが効果的なのだろうが、それが過度に進むと、視聴者が知るべき情報を十分に伝えられないという弊害が生まれかねない。シンプル過ぎるほどわかりやすいフレーズで得た情報だけを頼りに物事を判断することほど、危険なことはないのだ。

5. コメンテーターの役割が大学に与える影響

ここまでは、コメンテーターと番組の関係に

について制作者の視点から描いてきたが、今度は大学教員であるコメンテーターが番組に出演することによって、どういった影響を所属団体である大学に与えるのかについて見ていく。

筆者が所属する近畿大学では、2013年にコメンテーターガイドブックを作成、報道機関等に配布している。これには、大学の教員たちの氏名が専門分野とともに掲載されているのだが、近大の世耕石弘広報部長によると、研究成果を発信したいという大学のスタンスを表明する道具として作られた。

近大では、報道機関が教員たちに対して取材することが必要になった場合、広報部が間に入って、各学部の事務部から教員の携帯電話や自宅電話を通じて連絡を取るという体制を敷いている。それまでは報道機関が個別に教員に連絡を取って取材を行い、テレビで放映もしくは新聞に掲載されればそれで終わりという形だった。一方、教員に連絡を取れなければ取材も成立せず、また、仮に取材ができて放映・掲載されたとしても、大学でそれをデータベース化することや、放送局や新聞社との連絡手段を保つこともできずにいた。今は、「大学共有の人材、データが資産になる」（世耕氏）という考えを土台として、大学のプレスリリースなどを送る相手として、いったんできあがった報道機関との関係を保つよう努めているのだという。ただ、現在のような体制を持っている大学は日本ではまだ珍しいらしい。なお、近大の広報部では、幹部の携帯電話番号を報道機関に渡し、24時間体制で対応することになっている。

近大の教員がテレビ出演や新聞掲載を通じてマスメディアに露出することによる役割や効果として期待している点として、1) 研究成果を世に知らしめることによって社会貢献ができること、2) 研究に力を入れている大学であることを知ってもらい偏差値以外の価値を大学にもたらすこと、3) 大学の知名度を向上させること、という3点を世耕氏は挙げた。

特に1点めについて同氏は「大学教員は科研費や補助金など国民の税金をもらって研究をしており、文部科学省では、その研究成果を適切

な方法で社会に知らせるように求めている。学会の論文集や大学の紀要だけではなく、メディアでコメントすることを通じて一般の人々に知らせることに意義があると考えている」と語った。

積極的なメディア露出戦略が功を奏したのか、近畿大学にとって「相当な効果」が出ており、「広告効果への換算はしていないが、大学の名前に触れてもらえる効果は大きい」（世耕氏）状況となっている。

ただし、教員からの協力がいつでもスムーズに得られているわけではない。教員の中には、メディアに出ることを嫌がる人も少なからずいるのだという。「メディアに出るといった、そういうことは好きではない」と言う教員に対して、広報部では必ず「既に出ている人たちも好きで出ているわけではない。大学のため、社会貢献のために出ている」と話して、協力を要請している。世耕氏によれば、「実際に『あまり好きじゃない』と言った教員にお願いして出てもらったことがあるが、（出演後に）クレームが来たことはない」のだという。

メディアを通じて一般社会の人々に研究内容を知ってもらうことは、産官学連携のチャンスにつながることもあると近大では考えている。世耕氏は「社会にとっては、大学教員は教育をする人であり、産学連携または行政と連携をとって研究成果を生かすことができる人。（メディア露出を）きっかけとして知ってもらえる。そういうつながりを教員に活用して欲しい」と呼びかけている。

なお、これは近大に限った話ではないが、テレビ大阪の田淵氏は「知名度が上がってゼミの希望者が殺到した」、J:COMの小林氏は「講義の受講生が増えた」と言う話を、番組に出演した大学教員から聞くなど、副次的な効果も見られている。

6. コメンテーターが抱える課題と今後の展望

放送局の制作担当者たちに、コメンテーターたちが直面している課題について尋ねたところ、1) 視野の狭さ、2) 客観的な情報を多く

集めておく必要性、3) 無難なコメントの多さ、4) 奇抜さを狙った「キャラクター」作り、5) コメンテーターに頼りすぎているテレビ局、といった点が挙げられた。

毎日放送に以前在籍し現在はJ:COMで番組アドバイザーを務める小林氏は、選挙について報道する番組を制作した際に、「政党内の人事や、永田町でしか話題ならないようなことばかり話す政治学者に困ったことがある」と話す。

大学教員などの専門家は自分の専門分野を持っていることが存在意義でもあり、視野が狭いのはある程度やむをえないことではあるのだろう。だが、テレビ大阪の田淵氏は、「専門外の客観的データに弱いのは仕方がない」としつつも、「レギュラーコメンテーターになる場合には、『横のネットワーク』を生かして、専門家に取材してきてほしい」という要望を口にした。同氏はまた、専門家ではないコメンテーターには主観的なコメントが求められる傾向があることに釘を刺す。「自分の感想に説得力を持たせるためだけに、本当は取材していないのに、また客観的データがないにもかかわらず『私が〇〇に聞いた話では』『私が取材したところ』『以前、データを見せてもらったんですけど』など、いい加減なことを言うコメンテーターがいる。主観か、それとも客観的な情報に基づくものなのかをきちんと視聴者にわかる形でコメントしてほしい」と話す。

取材や自分の体験を積み重ねることの大切さを説くのは、関西テレビの川端氏も同様である。「無難なコメントはあまり視聴者の感情を動かさない。いわゆる『評論家然』としていることはマイナス効果。小さなことでもいいから、自分の体験談や取材で拾ってきた事象を紹介すればよいと思う」と話す。

J:COMの下田氏は、専門家であるコメンテーターが自分自身をどんな人物として見せようとするのかという観点に触れた。「専門家のコメンテーター自身が、バラエティ番組と報道番組の出演区別、パーソナリティのコントロールをしっかりとしないと、信頼度が落ちてしまうのでは、という懸念がある」のだという。

同じくJ:COMの小林氏は、専門家だけに限った話ではないがと前置きした上で、「いろいろな番組でコメンテーターの常連となっている人の中には、奇抜な、時には人を傷つけるような切り口のおしゃべりを売りにしている人がいるが、そう言う人が出てくると、番組の品格だけでなくテレビに対する信頼度を落としていくと感じる」と付け加えた。

同氏はまた、「放送局がコメンテーターに頼りすぎている傾向がある」点についても警鐘を鳴らす。「最近のテレビ番組はひな壇に芸能人や先生方を並べて、順番にコメントを求めるスタイルが多すぎる。番組制作者が内容を考えるのではなく、入れ物だけを作って中で語られる内容出演者に丸投げしているように見えるものもあり、これは制作者としてのプライドも義務も放棄しているように感じる」のだという。

小林氏は、コメンテーターが出演する度合いについて「個人的には減った方が良いと思っている」と語るが、どうやら今後も一定の需要は見込まれるようだ。

J:COMの下田氏は、「北朝鮮のメディアにはコメンテーターは出てこない。ほかの外国メディアのコメンテーター事情を知らないが、民主主義である日本のメディアにおいては、多様な人の多様な意見が聞けるということは重要だと思う」と語り、大学教員のコメンテーターについても、あらゆる専門分野のさまざまな見地・事例からわかりやすく学問や知識を広めるという「社会的にも大きな役割がある」との見方を示した。

「コメンテーターはニュースに幅を持たせられる存在として、また番組のカラーを出す存在として、これからも必要とされる」と話したのは、関西テレビの川端氏である。ただ、インターネットの発達に伴って、テレビ番組の内容がネット上で誇張されて伝わることも多くなっている。「ネットから批判されても、反論できる『根拠』を番組側も持つ必要がある。それができなければ、当たり障りのないコメンテーターが選ばれることになってしまうのではないだろうか」という危機感を募らせている。

全国ネットではないテレビ局ならではの事情に触れたのはテレビ大阪の田淵氏だった。「在阪各局はニュースにそこまで予算は組めないので、コメンテーターは各局で同じような人が使い回しされていくと思う」と話す。つまり、特定のコメンテーターが1～2日の間に複数のテレビ局の番組に出演する状況が生まれる。そのため、番組製作者側のメッセージを代弁するというよりは、視聴者の求めるコメントを代弁するという立場に偏っていき、結果として局のメッセージ性は薄まる、というのが田淵氏の見方である。そうしたなかで、「リサーチャーも兼務してくれて、タレントよりはギャラが安い大学教員のコメンテーターは、ありがたい存在になると思う。ただ、よりタレント向きに、主観的でビビッドなコメントを発信する性格が強く求められていくのではないだろうか」との見通しを示した。

7. まとめ

本稿では、テレビの情報番組にコメンテーターたちが出演する状況について、その役割、種類の異なるコメンテーターたちの比較、大学教員が出演することによる大学への影響、コメンテーターたちが直面する課題と今後の展望という観点から、テレビ局で番組制作に携わってきた関係者と大学の広報担当者に取材を行った。その上で筆者が実際に経験してきたコメンテーターという仕事を具体的な題材として活用し、まとめてきた。

コメンテーターは全般的に、一般視聴者と番組制作者の双方の立場を代弁しつつ、番組の流れにアクセントをつける役割が求められている。

そして、大学教員などの専門家のコメンテーターが出演する場合は、専門的で深い知識を豊富に持ち、情報収集・整理能力に長け、多角的な視点を持っているうえに、大学教員という肩書がもたらす信頼感がある。その一方で、専門家ではない評論家や芸能人がコメンテーターと

なる場合は、話術によって番組を盛り上げ、幅広いテーマに対応し、視聴者への効果的な働きかけができるといった価値をもたらしている。

コメンテーターの今後に関しては、乗り越えるべき課題が複数あるが、番組に幅を持たせ多様な見方を視聴者に提供するという観点からは、今後も形が変わりつつもその需要はあるとの見通しが明らかになった。

各放送局の現場で働く関係者の体験に基づいて本稿で示されたコメンテーターの姿は、コメンテーターの理想像でもなければ全く役に経たないコメンテーターというわけでもないだろう。コメンテーターも時代に応じて様々なキャラクターが求められ、時代と視聴者のニーズに即応できなければ消えていく運命にある。ただし、どのような時代、どのような社会にあっても事実を重視し、視聴者にわかりやすく説明できる能力が求められるのがコメンテーターの本質だろう。これは大学教員のコメンテーターでも同じことである。

また、テレビ局にコメンテーターを送り出している側の大学にとっても、社会貢献を行い、大学自身に付加価値を付けて知名度を上げるという点から見て、そのメリットが示された。

本稿には、コメンテーターの全体像をとらえると同時に、筆者が果たしてきた役割を振り返る目的もあった。あくまでも、狭い分野に焦点をあてるにとどまった一考察ではあるものの、コメンテーターが存在する意義について考える際に、そしてコメンテーターとして出演する際に、拙稿を提言のひとつとして活用していただけることが望ましい。また、それと同時に、元記者・現役の研究者・大学に所属する教員という複数の側面を持つ筆者としては、今般の取材で見えてきたコメンテーターの姿を、自分自身の今後のコメンテーター業にはもちろん生かしていくが、それだけではなく、教育や研究にも活用できる内容のものが得られたと自負している。